

今日の説教のポイント <使徒言行録 11 章 19-26 節>

どうしたら福音を伝えられるかについて考える時に大切な箇所です。

①「ステファノの事件をきっかけにして起こった迫害のために散らされた人々は」(19)

福音の拡がりはどのようにしてなされていったのでしょうか。普通は「使徒たちによって」という答えが思い浮かびます。しかし聖書はもう一つ答えを用意しています。エルサレムで起こった最初のキリスト者大迫害によって散らされた信徒たちから福音の拡がりがあったというのです。「さて、散って行った人々は、福音を告げ知らせながら巡り歩いた」(使徒 8:4)。種が風で飛ばされて、あちこちで芽を出し、花を咲かせ、実をならせるのと似ている気がします。自然を支配なさるのが神様なら、そこで起きることと似た面があっても当然なのかもしれません。思いもよらない風で吹き飛ばされて散って行かざるを得なくなった人たちが、そこそこでイエス・キリストの福音を語る中で、また主を信じる人々が起され、実をならせていったのです。

ここで強調しておきたいことは、使徒たちはエルサレムに残っていた(8:1)、すなわち、普通の信徒たちが散らされ、福音を伝えたのだということです。彼らは主イエスを信じる者とされた恵みを、迫害で散らされた状況の中にあっても、語らずにはおれなかったのです！ 聖書は、「主がこの人々を助けられたので、信じて主に立ち帰った者の数は多かった」(11:2)と記しています。福音の拡がりとは、正しく、間違いなく語るのではなく、その恵みを、その喜びを、素朴に覚え、生き、語らずにはおれない思いで伝えるところで起こっていくものなのです。ここに、「一人ひとりが伝道の器なのですよ」、と言われる所以があるのです。私たち一人ひとりに託されている使命を覚えたいと思います。

②「教会はバルナバをアンティオキアへ行くように派遣した。…こうして多くの人々が主へと導かれた。…二人は、丸一年の間その教会に一緒にいて多くの人々を教えた。…このアンティオキアで、弟子たちがキリスト者と呼ばれるようになったのである。」(22-26)

信じる者が増えていったらそれでいいのではないかと思うのですが、聖書はそうは言いません。アンティオキアの人々は、エルサレムの教会から遣わされたバルナバとパウロから、謙虚に、福音の恵みとそれに従った生き方について学び続けたのです。そのことから、自分の心の平安を求めるだけでなく、他者の身体的苦しみも覚えて援助する教会が築かれていったのです(27節以下)。私たちが目指すべき教会の姿です。